



フタバから遠く離れて ― 避難所からみた原発と日本社会 ―

松橋淳著

岩波書店 2012

経済学部教授 土屋 昌明

「フタバ」とは、福島第一原発のある双葉町のこと。周知のように、この町の人々は、原発事故で少なからぬ放射能を浴びた上に、原子力災害対策特別措置法に基づく避難指示によって、故郷を後にして見知らぬ町に避難せざるをえなくなった。双葉町の役所は、埼玉県にある騎西高校の校舎に移転し、その校舎にたくさんの町民が避難した。

本書の著者は、この双葉町の人々の生活と行政のあり方を直接撮影したドキュメンタリー『フタバから遠く離れて』を作った映画監督である。このドキュメンタリーは、今回の震災と原発事故をめぐる様々な問題を、双葉町の人々を軸にして描き出しており、深く考えさせられる作品である。この映画によって、原発事故が人々の生活にどれほど苛酷な影響を与えるか、生々しく知ることができる。思えば、あの事故の直後の学内会議で、原発から大量の放射能が漏出した場合に大学としてどうするのかを議論すべきだ、と必死で

わめいていた自分が想起される。

本書は、この映画の撮影事情や、そのプロセスで監督が考えたこと、映像では示せなかったこと、映像が双葉町の人々からどう見られたかなど、映像だけでは得られない情報と物語が読める。戦後の日本で最もシビアで巨大な天災と人災を、私たちはどのように認識したらよいのか。このドキュメンタリーはその認識に大きな力となる。そして本書によって、その認識を深めることができる。また、ドキュメンタリーが持つ色々な特徴や限界も見えてくる。

松橋監督は、続編『フタバから遠く離れて 第二部』もすでに発表している。だから私たちは、私たちがニュースなどで知っている福島原発事故の知識を出発点として、2つの連続したドキュメンタリーによって本書をサンドイッチにして読むこともできる。というか、そのようにして本書を読んでみるのがよいと思う。